

天保野名之報

特 別  
^5  
6590  
59



父を侍し左様は如やふの目



御古

序の段の末ある

孫先

杉二

鳴つてを序や退して渡りし

州化

西の段の末ある

一貴

中程ありしに結の紐をとりし

己伯

君御ありしに結の紐をとりし

尾六

流のとりし結の紐をとりし

杉島

なごりの段の末ある

杉島



うなまの海さやまの藤よん  
越すーにさかひー心婦入  
ひー小糸と云ふ教ことし  
心原をーひとくー淵の涌り  
のくさいて月とて思を守るて  
に西をらるし裕きる  
次元ー生山穂る枝の枝  
流地つー精のかけ来る

らん年成ーて信宿をたひ  
美きー妙し二日やうり  
可きとて候嫁とて思もさるや  
あきー小口のなとわす

うなまの海

月を舟をさくふー及ー早の夜  
あきさやまの海さやまの月  
昇る

あつた月えあまき 龍や船の志 那心  
あつた月えあまき 川も又 杉二

さし山とささしとや 夕方の月 一貫

津の潮の耳 夕の月 龍長  
お糸の糸 夕の月 杉二  
夕の月 夕の月 杉二  
夕の月 夕の月 杉二  
夕の月 夕の月 杉二

あつた月えあまき 龍や船の志 那心  
あつた月えあまき 川も又 杉二  
さし山とささしとや 夕方の月 一貫  
津の潮の耳 夕の月 龍長  
お糸の糸 夕の月 杉二  
夕の月 夕の月 杉二  
夕の月 夕の月 杉二  
夕の月 夕の月 杉二  
あつた月えあまき 龍や船の志 那心  
あつた月えあまき 川も又 杉二  
さし山とささしとや 夕方の月 一貫  
津の潮の耳 夕の月 龍長  
お糸の糸 夕の月 杉二  
夕の月 夕の月 杉二  
夕の月 夕の月 杉二  
夕の月 夕の月 杉二

膚の汗をよもにぬるよ  
生る汗の癖はよもよも  
海邊の波の満ちたる  
徳人の言はぬるよもよも  
着きぬしよもにぬるよ  
おれよしよもよもよも  
田んぼのうらやうのうらやう  
徳人の言はぬるよもよも

あつたよもよもよも  
風の傳はぬるよもよも  
あつたよもよもよも  
年費のついでにぬるよも  
よもよもよもよも  
吉りをぬるよもよも  
徳人の言はぬるよもよも  
あつたよもよもよも

燈子頭りししのまゝを  
てきをそへてさへしる瀧子の帯  
ぞくちりのまゝに 滝川  
暴風を思ふにさすししまの毛  
今ハ侍舟の軍 実中  
このまゝを念を念に吐きし  
雲ぬりし小籠芋ししし海苔  
夕暮の川

余月中のりし戸は屋敷子  
ゆしうのまゝのりしししししし  
ははをそへてさへしる瀧子の帯

夕暮

夕暮の川  
一し海苔の帯をそへてさへしる瀧子の帯  
ははをそへてさへしる瀧子の帯  
浦のまゝを念を念に吐きし

二 海 一

硯もかきまのふりや書く一掃  
水も味う後集の龍あり  
後井田山崎へけて樹西そく  
娘のゆりに糸を抜くなまき  
二 掃 二 掃

古ハウズ

急度

筆の結曲尺とりてえの紙を少時  
一と早ぬ自のせきいねお二

けねん出平く非の案ありして 後

ちそあ

ふのふ集津の巻に後水あうらう二  
淡川や結一のさあるゑの寂







右類あり

てしあふきあふきあふきあふき

あふき

あふきあふきあふきあふきあふき

あふきあふきあふきあふきあふきあふき

あふきあふきあふきあふきあふきあふきあふき

あふき

あふき

あふきあふきあふきあふきあふきあふき

あふきあふきあふきあふきあふきあふきあふき

あふきあふきあふきあふきあふきあふきあふき

あふき

あふき



多しと云ふことありと云

をうへりて代はるねの流り

の合角力

又月の影や流しぬるものを

小松あけてまの空に流るる

天保子と云ふ月印のま

く深川を流るる屋君事

わひし折れぬまのまを流

子新と云ふ川けりしと云ふ

震屋

自を由流るるまの事

和島

そ境を流るるまの事

和島

流るるまの事

和島

透してしち核子印と世をこまみ 昂六  
 傳しあそ核をさく 何れ後 樽風  
 用し只世を核しとさく申ん 蘭石  
 つめいとい核をさくさく乳 乳湯  
 を核しと世のよるるにせしと身 紹花  
 上かこすて人さるるいはくぬ山  
 二浦も角核しと世を核の以

世のさく一と世も核をさくする  
 金まとい身まといの油を核しと身  
 二核しと世のよるるにせしと身  
 神 小まあまを核しと世を核しと身  
 核しと世のよるるにせしと身  
 筆 二と世のよるるにせしと身  
 後のよるるにせしと身

世とあて土の気もなる月と事  
江の浦のささぎ 俗島をゆく  
まんとしもの葉子と柳枝をゆく  
美一やしく入るの鹿 鹿  
ふふふりしとたる座の花  
情をなげきしあはれ友  
右程音り

新ふ程の風ありと夏の気  
春の気しと夏をとりと夏の気  
海砂の橋の橋や夏の気  
風をささぎし柳をささぎの気  
未だささぎはなしてぬゆの気  
言ふある松をささぎの気  
枝の枝より体わりの気  
多ふ  
横風  
洋と  
柳花  
柳花  
柳花

こゝろのあはれ

秋のふゆ

お代はてや 飾る 秋の降甲

。

あはれや 秋のふゆ

はたは 秋のふゆ

あはれや 秋のふゆ

あはれや 秋のふゆ

あはれや 秋のふゆ

あはれや 秋のふゆ

あはれや 秋のふゆ

あはれや 秋のふゆ

あはれや 秋のふゆ

あはれ

あはれ

あはれ



新を越すの村小松と居て

まゝあるふら松の好介

形も又好くもをりや

あんなくふたすのなすは後身もあな

うのふらひもを松とれ

ろりろろ 粒のなまら

頼る水もも虫遊る

一変

師の目や 濁れぬふいふ酒を

竹 浮ぶ運の 夕月

首水

変りて 何ふ立位や 論しん

岸六

そらそら 舟のさうや

船古

舟の目上 市のあるおとりの 換

屋石

紙子は ちりちり 朱をまき

茂竹

糸ふの 柄も 糸ふぬ ちりの

一言

構を ちりちり 糸ふぬ 舟

料化

糸ふぬ 糸ふぬ 糸ふぬ 糸ふぬ

和島

糸ふぬ 糸ふぬ 糸ふぬ 糸ふぬ

里約

糸ふぬ 糸ふぬ 糸ふぬ 糸ふぬ

市院

うらふ桂の下か所の里  
魂のこゝろをぬかの伝授し  
まゝにまゝにぬかの子の伝  
ちまのまゝにぬかのまゝに  
風をまゝにぬかのまゝに  
佐藤のまゝにぬかのまゝに  
むいゝ影をぬかのまゝに

松風  
和泉  
芦原  
西溪  
松二

川を所へぬかのまゝにぬかのまゝに  
まゝにぬかのまゝにぬかのまゝに

右廻り下果

ちやうどまゝにぬか

ぬかのまゝにぬかのまゝにぬかのまゝに  
ぬかのまゝにぬかのまゝにぬかのまゝに  
ぬかのまゝにぬかのまゝにぬかのまゝに





さうぢや樹少むれとゆゑる

八月廿一日

秋の果のあまをよそ人 秋の果を

目しとたはらそぢ一高の候 暮

村よふまをむいそ 暮

送の如くはれを新あふん 松二

よとやあのみのかげ候 暮

おちりてその中よのまをひよ

外りそとそ村中より

舟の如きとて候をゆゑ

かきそとのうたのよ

うらみとてそとあふあ

うらみとてそとあふあ







りあつたのあし鈍くもあつた  
俗権をとりけりけり 禪けり  
ちのちをせしきりきり 子もあつた  
きりけりけりけりけり けりけり  
七田の枝のうへはけりけり  
松多ふゆきけりけりけり  
つゝ枝のよんはけりけり

さやうしてふしてよおつた  
庚申をふしてふして  
木のつらふやけりけり  
ちのちの枝のうへはけり  
肺のうへはけりけり  
袖のうへはけりけり  
右のうへはけりけり  
左のうへはけりけり

名日少多 浮るをくつせのを  
わきまも 甲午の花 下  
村中 ありはちのちの母  
活り 侍るの 上 下  
浪人を かくの 柳 心  
詩の 友 誼の 酒を 操る  
手 あり 花の 業  
自我 水の 知

右歌仙

可也

名日 如 け とも あり して 終 年 末  
尺 寸 後 亦 不 なる あり して 終 年 末  
名 日 如 け とも あり して 終 年 末  
そ 亦 不 なる あり して 終 年 末

松二

44

35

25



ついでに  
今春も一花をめでたしと  
遠く此一花をめでたしと  
又よその花も一花をめでたしと  
花のまき待つまきの 礼まこ

○

入臨まよふ花のまき  
入臨まよふ花のまき  
入臨まよふ花のまき  
入臨まよふ花のまき  
入臨まよふ花のまき  
入臨まよふ花のまき  
入臨まよふ花のまき  
入臨まよふ花のまき

入 酔りのい角鶴腰きー 尻紐く

ナリ、のりあふ

入 草のよまていー 草のよまていー 一ノ松

陽の影ー さまく 影も 和る

松  
お二

草のよまていー 草のよまていー

二 母のよまていー 草のよまていー

いー 〇 小まていー 草のよまていー

五方 友 君 想 ぬ 師 の

よまていー 草のよまていー

草のよまていー 草のよまていー

入 町 草のよまていー 草のよまていー

ちやうど、昔の行きの  
年がたるとは、

ちやうど、昔の行きの  
年がたるとは、

下巻とや、芳代因むやしのまゝ、

いふ事、年がたるとは、

いふ事、年がたるとは、

いふ事、年がたるとは、

いふ事、年がたるとは、

いふ事、年がたるとは、

いふ事、年がたるとは、

いふ事、年がたるとは、

いふ事、年がたるとは、

いふ事、年がたるとは、

○

いふ事、年がたるとは、

おまハッ 陽ねる云

○形をこりて幸のむきや子銀  
ほあ〜てまきさひの田長らん

陽中一のらん〜

○ありしものね〜  
あ〜らん〜  
ね〜

○ふれ〜  
玉輝〜  
萬〜  
落〜  
○三〜  
○ふ〜  
き〜





和歌

。朝し一ひなみさく好の定し

。のろみけさくしけし唐面やまの記

おりの病のひまふぬく清らぬ

と木やちねまひる結念

や中よきくやましくひのまらそ

きとしーのた

候やしのののかはすし一お

。一回席よりけはるをまら

やあやまらしーなる

ちよまらしーの清し好の丸

。あまらしーやうきし

まらのまらのあまらしー候の向はるし

今よりさうさうと秋をいふ

○子どろみふはくまの所の四角を扇

○首のまぶしのまぶしをかえさるてさる節

●市橋まぶしをいして増し

歌 あつたき月を

○秋のまぶしをいしてさうさうさう

○夕なりや移のまぶし清く

けけしとるた君がまぶし

牧あもむさひのまぶし

いまの秋のまぶしをいして

わあ〜と移の標や秋のまぶし

○ 夕々しきや移ゆいよを待つてらん

望まけりてりよて移ゆかたりの月

此所子に梅の葉の影をてらん

池をよるるふるやーあゝあゝの地

金月の影は浅やうの月

市街をわたりてりよてらん

友らして馬の影をてらん

やうてあゝあゝの地をてらん

三行

○ 夕々しきや移ゆいよを待つてらん

十日松風こゝろの影をてらん

春の影は夕々しきや移ゆいよを待つてらん

○ 夕々しきや移ゆいよを待つてらん

○ 夕々しきや移ゆいよを待つてらん

己十... ぼる

ちころの... 備おつるもやを心先  
ひらる哉の柳なをまあるのこ  
こは... けして

あつ... ねたつて

。ち... みる

や、西 月むす

美中... 居

作... の... あり

田... 書

静夫... 系

文... の... 居

まね 採石の殿

つらね殿の殿もなすいそすしつらね  
○ 採石の殿もなすいそすしつらね  
まね入

あともあともして  
アとの杖柄もなすいそすしつらね

まの甲しすきす柄  
まの甲しすきす柄

午の杖すすははらふおのまをい

午の杖すすははらふおのまをい  
すすははらふおのまをい

このせんか

まの甲しすきす柄  
まの甲しすきす柄

人の

まの甲しすきす柄  
まの甲しすきす柄

又清はりて載あつて

まの甲しすきす柄  
まの甲しすきす柄

君の代を  
まの甲しすきす柄  
まの甲しすきす柄

考らる人よりあまの  
まじしちよあく

まじりのゆき水より水より

まじりの水より水より

まじりの水より水より

まじりの水より水より  
まじりの水より水より

まじりの水より水より

まじりの水より水より

まじりの水より水より

まじりの水より水より

まじりの水より水より

まじりの水より水より

花をさぐりてはるはあやめをいし  
花の花  
あやめの中ふあやめをいし  
あやめをいし

千はるはる

山のあやめをいし  
あやめをいし  
あやめをいし

あやめをいし  
あやめをいし  
あやめをいし

あやめをいし  
あやめをいし  
あやめをいし

あやめをいし  
あやめをいし  
あやめをいし

あやめをいし  
あやめをいし  
あやめをいし

あやめをいし  
あやめをいし  
あやめをいし

あやめをいし  
あやめをいし  
あやめをいし

あやめをいし  
あやめをいし  
あやめをいし

あやめをいし  
あやめをいし  
あやめをいし

あやめをいし  
あやめをいし  
あやめをいし





